

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 9 月 14 日現在

機関番号：32694

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K16835

研究課題名(和文) 地域メディアを利用した近代日本地域社会史研究の新天地 - 『北桑時報』を素材に -

研究課題名(英文) A Study on Modern Japanese Community History by Regional Media

研究代表者

吉岡 拓 (Yoshioka, Taku)

恵泉女学園大学・人文学部・助教

研究者番号：50733309

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,900,000円

研究成果の概要(和文)：大正8年(1918)1月に創刊し、戦時期の休刊を挟みながら現在まで刊行が継続している地域メディア『北桑時報』について、その戦前期刊行分の残存状況の調査を行った。

その上で、『北桑時報』の編集委員も務め、同誌に多数の論説・文芸創作を寄稿した井川市太郎という人物に着目し、一時期は『太陽』『京都日出新聞』といった大手のメディアに論説を投稿していた井川が、なぜ『北桑時報』などの地域メディアの編纂に深くかかわるようになるのかを分析した。

研究成果の概要(英文)：I investigated the remnants about publication of prewar period of "Hokuso-Jiho" (Published in Taisho 8 years, after the interruption during the war, the publication continues to date).

In addition, I focused on the person Ikawa Ichitaro and analyzed why he became enthusiastically involved in editing "Hokuso-Jiho".

研究分野：日本近代史

キーワード：北桑時報 井川市太郎 地域メディア 北桑田郡 社会教育

## 1. 研究開始当初の背景

『北桑時報』(以下、『時報』)は、第1次世界大戦による好景気に沸いていた大正8年(1919)1月、京都府北桑田郡で創刊された雑誌である。当初は郡の広報誌という位置づけであったが、やがて郡内住民による投稿文が多数掲載されるようになり、様々な問題が誌上で活発に議論された。昭和17年(1942)5月に休刊を余儀なくされたものの、戦後の昭和23年(1948)8月に復刊。以後、様々な困難に直面しながらも、今日まで刊行が続いている。大正期に地域社会で創刊された新聞・雑誌(地域メディア)で今日まで刊行が継続しているというのは、全国的に見ても稀有であり、日本近現代地域社会史研究上、『時報』の史的価値は極めて高いといえる。しかし、本研究課題遂行以前において、『時報』を利用した歴史研究はごくわずかであった。その理由は、『時報』を利用するための環境が整っていない、という点に尽きる。

一方、地域メディアを活用した大正・昭和期の地域社会史研究は、長野県内の事例を中心に一定の蓄積がある。また、地域メディアを素材に当該時期の農村青年・婦人の意識について検討を行った研究は少なくない。だが、それらの研究では、雑誌・新聞自体が途中で廃刊となってしまうことから、10年・20年という長いタイムスパンで検討を行うことができていない。すなわち、従来の研究は、デモクラシー的思潮が農村社会にも浸透してきた大正期に自我を確立していった人々が、なぜ1930年代以降は国家主義・軍国主義を地域で支える存在へと転化していくのか、という大正・昭和戦前期地域社会史研究のみならず、日本近現代史研究全体にとっても極めて重要な問題に回答を提示できていなかった、といえるのである。

研究代表者は、平成18年(2006)より日本中世史研究者である坂田聡中央大学教授が代表を務める旧丹波国山国荘の史料調査活動(山国荘調査団)に加わった。その坂田氏が、平成20年度~23年度にかけて「室町期~明治維新时期丹波国山国地域における百姓と天皇の関係に関する研究」との課題で科研費の交付を受けたことから、研究代表者もその研究課題の関連で明治期の史料の調査と研究を進めた。さらに、平成23年度からは研究代表者が日本学術振興会特別研究員(PD)に採用されたことから、調査の範囲を大正・昭和戦前期にまで拡大して研究を進めた。しかし、山国地域は大正・昭和戦前期の史料の残存状況が悪く、当該時期に地域内で起こった事件・出来事について検討するのは容易ではなかった。研究代表者が『時報』の存在を知ったのはその調査過程であり、『時報』との出会いによって、上に述べた問題が一定程度解消され、坂田氏との共著『民衆と天皇』の刊行につなげることができた。

しかし、上記の研究は、検討の事例を山国地域に限定していたため、『時報』の利用に

についても、山国地域の出来事や同地域の住民が投稿したと断定できる記事だけを抽出するという、極めて限定的な作業に止めざるを得なかった。だが、他の記事にも興味深いものが非常に多く、これらの記事をも含めて分析すれば、大正・昭和戦前期の農村社会を生きた人々の郷土意識や国家観について、坂田氏との共著本よりもさらに踏み込んだ議論を行うことが可能となると考え、本研究課題に取り組むことを思い至った。

## 2. 研究の目的

1. で述べた点を前提に、本研究課題では『時報』の戦前期刊行分の残存状況の調査、『時報』に膨大な数の論説を載せ、戦時中は北桑田郡弓削村の村長となり地域社会を支える存在として活動した井川市太郎という人物についての検討、以上2点に取り組むことで、日本近代地域社会史研究の進展とその社会的還元を目指すことを目的と定めた。

既に触れてきたように、地域メディアを利用して大正・昭和戦前期の農村社会の人々の意識・思想を検討した研究は、これまでも少なからず存在している。しかし、対象を特定の個人に絞り込み、長いタイムスパンでその人物の意識・思想とそれが変化していく過程と所以をあきらかにしようとした研究は皆無である。この一連の作業は、既述したような特徴を持つ『時報』という雑誌を利用することではじめて可能になるのであり、その『時報』について、残存状況の確認という研究環境の整備面までを含めて取り組まれる本研究が日本近現代地域社会史研究上に有する意義は極めて大きいといえるであろう。

## 3. 研究の方法

本研究では、まず『時報』の戦前期刊行分についての所在情報を可能な限り確認する作業を行った。京都府立総合資料館(現京都府立京都学・歴史館)、北桑時報協会、京北合同庁舎(図書室)、山国自治会館、弓削自治会館、亀岡市文化資料館などの施設で調査を行い、『時報』の所蔵状況を確認した。また、研究代表者が『時報』復刊第275号(2015年7月刊)に寄稿した論考「北桑時報は、なぜ続いてきたのか」の文末に『時報』の所在について調査中であることを明記し、所蔵情報の提供をよびかけた。

所在状況の確認が終わった上で、次に井川市太郎が『時報』、ならびに旧丹波地域で大正後期~昭和初期に刊行されていた『丹波青年』の2つの地域メディアに寄稿した論考、ならびに『太陽』『京都日出新聞』といった大メディアに投稿した論考を収集し、その内容を分析した。井川は実名以外に「朝陽山人」「火吹竹」という二つのペンネームで記事の寄稿を行っていたため、この3つの署名による論考を網羅的に収集した。なお、『丹波青

年』は研究課題採択当初はその存在を認識していなかったが、調査の過程で亀岡市文化資料館に複数号所蔵されていることを知り、新たに調査対象として加えたものである。

#### 4. 研究成果

本研究課題での調査の結果、『時報』戦前期刊行分(1~265号。ただし275号終刊という説もあり)のうち、2018年3月現在で残存が確認できていないのが21~32、40、76、79、85、232号(計17号分)。北桑時報協会でのみ残存が確認できたものが1~20、33~38、43~57、61、64~66、98、107、109、119、136、140、146、148、150、151、154、158、185、210、212、242、248、260号(計63号分)であった。上記以外の号については、京都府立京都学・歴彩館においてマイクロ資料として閲覧が可能である(ただし、マイクロの撮影上の問題や撮影した『時報』の落丁などがあり、すべての内容を確認できるわけではない)。

上記の調査結果を基に、『時報』に掲載された井川市太郎の論考・文芸創作計129点、『丹波青年』に掲載された論考計12点、『京都日出新聞』掲載論考3点、『太陽』掲載論考1点を収集し、分析を行った。

その結果、まず論考の投稿に関する特徴として、井川が『太陽』『京都日出新聞』に論考を投稿したのは大正後期に限られていること、井川は大正15年9月より『時報』の編集員となり、その結果『時報』への寄稿が急増すること、井川の『時報』への寄稿は『時報』第128号(昭和12年6月刊)を最後になくなるが、これは井川が同年4月に弓削村助役に就任し『時報』編集員を辞職した結果であること、以上の点が判明した。

その上で、次に井川がなぜ『太陽』『京都日出新聞』といった大メディアへの寄稿をやめ、『時報』という地域メディアへの寄稿、編集に従事するようになるのかを分析した。その結果、井川が地域メディアの刊行に積極的に関わるようになったのは、井川が当時北桑田郡内には存在していなかった中等教育機関の代替として『時報』を通じた社会教育を実施しようとしていたためであったことをあきらかにした。また、そのための具体的な方法として、井川は当初文芸創作の有効性に着目していたが、郡民の政治的無関心に気づいた昭和6年以降、政治・社会批評を重視するようになっていくことをあきらかにした。なお、以上の成果は「5. 主な発表論文等」の〔雑誌論文〕「地域メディア『北桑時報』と井川市太郎の言論活動」として公開している。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計5件)

吉岡拓、『北桑時報』は、なぜ続いてきたのか、『北桑時報』、招待有、復刊第275号、2015、7-19

吉岡拓、近世後期地域社会における天皇・朝廷権威：丹波国桑田郡山国郷禁裏御料七ヶ村の鮎献上(網役)を事例に、『恵泉女学園大学紀要』、査読有、第28号、2016、2-26  
[https://keisen.repo.nii.ac.jp/?action=pages\\_view\\_main&active\\_action=repository\\_view\\_main\\_item\\_detail&item\\_id=905&item\\_no=1&page\\_id=28&block\\_id=68](https://keisen.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=905&item_no=1&page_id=28&block_id=68)

吉岡拓、近世後期大嘗祭斎田抜穂の儀と地域社会：丹波国桑田郡烏居村(山国郷内禁裏御料七ヶ村)、船井郡並河村の事例から、『恵泉女学園大学紀要』、査読有、第29号、2017、205-234

[https://keisen.repo.nii.ac.jp/?action=pages\\_view\\_main&active\\_action=repository\\_view\\_main\\_item\\_detail&item\\_id=1017&item\\_no=1&page\\_id=28&block\\_id=68](https://keisen.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=1017&item_no=1&page_id=28&block_id=68)

吉岡拓、明治維新史と天皇制研究、『歴史評論』、招待有、第812号、2018、16-26

吉岡拓、地域メディア『北桑時報』と井川市太郎の言論活動、『恵泉女学園大学紀要』、査読有、第30号、2018、224-250

[https://keisen.repo.nii.ac.jp/?action=pages\\_view\\_main&active\\_action=repository\\_view\\_main\\_item\\_detail&item\\_id=1053&item\\_no=1&page\\_id=28&block\\_id=68](https://keisen.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=1053&item_no=1&page_id=28&block_id=68)

〔学会発表〕(計1件)

吉岡拓、近世畿内・近国社会と天皇・朝廷権威、歴史学研究会近世史部会大会準備報告会、2018

〔図書〕(計0件)

特になし

〔産業財産権〕

特になし

出願状況(計0件)

特になし

取得状況(計0件)

特になし

〔その他〕  
ホームページ等

特になし

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

吉岡 拓 (YOSHIOKA, Taku)  
恵泉女学園大学・人文学部・助教  
研究者番号：50733309

### (2) 研究分担者

なし

### (3) 研究協力者

大庭 裕介 (OOBA Yusuke)  
柏原 洋太 (KASHIWABARA, Hirotaka)  
篠崎 祐太 (SHINOZAKI, Yuta)  
柳澤 誠 (YANAGISAWA, Makoto)